

2018年夏大会

夏大会シンポジウム「学問の世俗性と宗教言説」総括

宗教概念批判の深まりによって宗教と世俗との二分法が流動化した今日、「宗教」について語る学問の言説が「世俗的」であることはもはや必ずしも自明ではない。近代以降、特定の信仰に立脚してなされる神学とは異なる「世俗の学問」として自己を規定してきた宗教学がこの問題にとりわけ敏感になるのは当然だが、哲学や社会学、人類学など他の諸学問もまた、宗教言説の生成に携わるかぎりでは同じ困難に向き合わざるをえない。本シンポジウムの企図は、学問の世俗性というこの問われざる前提をさまざまな角度から再考することにあった。

杉本隆司氏の提題「世俗の神学としての社会学——コントの精神的権力論をめぐって」では、オーギュスト・コントの提唱した「社会学」が、かつて神学が担っていた社会的役割を近代社会で引き受ける「世俗の神学」として構想されたものであることが明らかにされた。コントは、人々が何にも信を置けなくなってしまった革命後の混乱したフランス社会に秩序を取り戻すべく、科学による新しい精神的権力を打ち立てようとした。そこにおいて学者は、社会の進歩を民衆に提示する「近代の聖職者」となるだろう。こうしたコントの社会学の構想は、学問における宗教と世俗の二分法について再考を促す重要な歴史的素材である。

須藤孝也氏の提題「キルケゴールを論じる者の実存」は、哲学的宗教言説に焦点をあわせ、その類型と課題とを自身の研究対象であるキルケゴールに即して示すものであった。キリスト教の実定性に立つキルケゴールの思想は、宗教の真理性を哲学的真理として再構成する「閉じた」宗教哲学研究とは折り合いが悪い。これに対し、須藤氏が展望する「開かれた」宗教哲学研究は、西洋近代哲学そのものが帯びる実定性をも眼差しながら、哲学と宗教との差異を前提に、それらのありうべき関係づけを思索するものであった。この開かれた宗教哲学研究におい

て、キルケゴールの実存の思想は、研究者当人も含む多様な実存について反省的な考察を深めつつ、他なる「単独者」の尊厳を承認する多元主義的な視座へと開かれていくものであるだろう。

間永次郎氏の提題「英領インドにおける『宗教』言説——ガンディー研究者としての立場から」は、従来のサバルタン研究の限界を指摘し、インド土着の神秘思想と近代西洋思想との異種混合性からガンディーを捉える視点を強調する。複数言語にまたがって展開されたガンディーの宗教思想を対象としたこれまでの研究の多くは、研究者自身の言語的制約から、限定的な史料に基づいてなされてきた。そうした研究が概して英訳テキストを重視した結果、ガンディーの宗教性を二言目には「西洋近代」「プロテスタント」と結びつける問題ある言説が流布することとなった。こうした研究動向は、同時代の有力理論へのヘゲモニックな従属意識を反映するものであり、ここには学問的宗教言説を生成する研究者当人の隠蔽された世俗的動機が垣間見られる。

以上三つの提題ののち、特定質問者として登壇した深澤英隆氏によって本シンポジウムが提起した問いの理論的背景の整理がなされ、また各提題についてもそれぞれ質問が提出された。その後、会場との討議を経て、議論は最終的に宗教に関わる研究者自身の動機づけの検討へと向かった。「ポスト世俗化」を指摘する声も聞かれる今日において、宗教を論じる諸学問がどのように自己を規定すべきかという問いは、なお研究者各人に対して開かれたままである。これについて一様ではない豊かな仕方で反省が深められたことは、本シンポジウムの成果として積極的に評価したい。